

経 済 港 湾 委 員 会 記 録 (No.14)

1 日 時 令和7年11月20日(木)
午前10時00分 開会
午後11時52分 閉会

2 場 所 第3委員会室

3 出席委員(9人)

委 員 長	渡 辺 修 一	副 委 員 長	三 宅 まゆみ
委 員	菊 地 公 平	委 員	上 野 照 弘
委 員	香 月 耕 治	委 員	富 士 川 厚 子
委 員	大 石 正 信	委 員	井 上 しんご
委 員	松 尾 和 也		

4 欠席委員(0人)

5 出席説明員

産業経済局長	柴 田 泰 平	地域経済振興部長	丸 山 保
雇用・産業人材政策課長	小 西 康 平	就業支援担当課長	菊 原 康 弘
中小企業振興課長	藤 原 国 久	港湾空港局長	倉 富 樹一郎
公営競技局長	春 日 伸 一		外 関係職員

6 事務局職員

議事課長	木 村 貴 治	書 記	西 嶋 真
------	---------	-----	-------

7 付議事件及び会議結果

番号	付 議 事 件	会 議 結 果
1	行政視察について	10月28日から30日に行った行政視察について、委員間で意見交換を行った。
2	地域経済の成長とにぎわいの創出及び農林水産業の活性化について	産業経済局から別添資料のとおり説明を受けた。

8 会議の経過

○委員長（渡辺修一君） それでは、開会します。

本日は、所管事務の調査を行います。

初めに、10月28日から30日に行いました行政視察について、委員間で意見交換を行います。

他都市の先進的な取組に関する所感や、本市で取り組むべき事例、また、取組に当たっての問題点や課題などについて意見交換を行っていただきたいと思えます。

本日の意見交換の内容は、正副委員長で取りまとめた上、議長に提出する行政視察報告書や所管事務調査の委員会報告書の中で反映させていただきたいと思えます。本市の行政施策への反映や執行部への提言など、今回の行政視察が実りあるものとなるよう、活発な意見交換をお願いいたします。

なお、今回は、所管事務調査の一環として委員間で意見交換を行うものですので、執行部に対する質問については、事実確認など必要な範囲で行うようよろしくお願いいたします。

それではまず、ボートレース大村のパーク化及び地域貢献の取組について意見交換を行います。

ボートレース大村では、ボートレースパーク化の現状や課題のほか、地域貢献の取組等について調査いたしました。意見、提案があれば発言をよろしくお願いいたします。大石委員。

○委員（大石正信君） 2つ感じました。1つはファンサービス、2つ目は地理的条件。初めて参加させていただいて、売上げは伸びている、それには利益をファンに還元していると。聞いたところによると、G I レースとかがあれば、北九州市から行けば高速道路の料金も支出してもらったりとかっていう形で、とにかく還元している。道路とか公園とかについても、大村ボートでやりましたということを表示している。もうけるだけじゃなくて、地域の皆さんに親しまれるような形で還元しているなどというのをもう強く思いました。私も参加して、初めてお土産を、カステラと日本酒を、あんなのをもらったのは初めてです。舟券も初めて購入させてもらいましたけども、非常に明るくて、自動販売機でも買える、そして、その状況についても分かるみたいな形で、高齢者とともに若い人も投票できるような状況になっているなど。

それと、もう一つは、地理的条件が非常にいいと、駅からも非常に近いし、大村湾に面していて、非常に波もなぎとつか、荒れてないっていう状況。そして、パーク化されているって

いうことで、子供さんから若者まで広く、ボートっていったら何かもうおじさんたちが行くような感じのイメージがありますけども、若者から子供さんまで参加できるような状況になっているということ。利益も還元している、そして、収益も大村市の税収が130億円って言われていたんですけど、それに対して一般会計への繰入れが150億円っていうことで、本当に大村ボートさまさまというか、そういうのを感じました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） ありがとうございます。

ほかにありませんか。富士川委員。

○委員（富士川厚子君） 私も大村ボートに行って思ったのは、若松ボートはイメージがかっぱなんですかね。大村ボートは、オサムグッズの書いているターンマーク坊やとって、すごいかわいくて、かばんとか、私たちが頂いたタオルとか、お酒からカステラからとにかく全部にターンマーク坊やが入って、もうそれを見たら、多分大村市の人もボートって分かるくらい定着している。あと今回、北九州市も200億円を繰り出してトイレとかを造られると思うんですけど、大村市も大村ボートから支出したいろいろなものに関しては、そういうマークをちゃんと入れて、小さく入れていると言われていたから、北九州市もそのぐらいやってもいいんじゃないかなって言うのをすごく思いました。そうすると、マークも自然と浸透するし、もうちょっとかっぱの顔を優しくしたら女性受けもいいかなと思ったり。北九州市もグッズを売っているのか分からないですけども、1,000円ぐらいでかばんとかも売っていて、こうやって持って歩くだけでも宣伝になるんじゃないかなと思いました。そういうグッズとかマークは大事なんだと改めて思いました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 上野委員。

○委員（上野照弘君） 関連しますけれども、僕も初めてボートレース大村にお伺いをさせていただきました。ボートレース若松を持つ若松区民として、ボートレース大村に向かう前に、まず地元の競艇ファンの友人たちに今度ボートレース大村に視察に行くんだよねと話をさせていただいて、どういうところだろうって話を聞くと、とにかくファンサービスがすごいらしいよという前情報をいただいた上でボートレース大村にお伺いをさせていただきました。現地でお話をいろいろ聞かせていただきますと、大村という場所はあまり行きやすい場所ではないにもかかわらず、遠方からのお客さんをしっかり集客するための取組というのを一生懸命されてこられているんだと改めて感じた次第です。高速道路の料金をちょっとキャッシュバックする仕組みであったりとか、様々なことをやられているわけでありましてけれども、地域への貢献をしっかりとやっているなというのを肌で感じました。一般会計の繰入れもすごい額を、市の規模とすればとんでもない額を入れている、地域に愛されるほどの、もう愛されて当然なくらいの大きな繰入れがあるわけでありましてけれども、それをしっかり見える化を図っているなと感じた次第です。

今、富士川委員からもターンマーク坊やの活用というのがありましたけれども、若松ボート

もかっぱくんみたいなキャラクターもあるわけであって、若松区のキャラクターとしては、わかっぱという、やっぱりかっぱを使った赤いかっぱがいて、ぜひ、そういうのもフルに、市民の目につくような取組を通じて、貢献していますよと市への貢献度というのをさらにPRしていただきたいなど、大村の地から若松区を思ったわけであります。私からは以上です。

○委員長（渡辺修一君） 井上委員。

○委員（井上しんご君） 視察の感想を言わせていただきます。

自分はターンマーク坊やを競走会のキャラクターだと思っていましたが、いや、これは実は大村のですよと言われて、そうだったんだと。自分も昔からあのキャラクターはよく知っていたんですけども、それだけいろいろな部分で浸透しているのかなと思いました。

この前、総務市民局長の三浦さんとお会いして、公営競技局長もされた方で、大村の管理者ってというのは全国でも非常に有名な方で、自分も局長に赴任したときには大村の局長さんに負けないようにと意識してやっていたとお話しされていました。大村市においては、大村競艇の売上げというか収益と、市の予算規模がもうあまり変わらないというぐらいありました。訪問して思ったのは、雇用というか、若い職員さんが多いなと思いました。若い女性の職員さんとか、なかなか競艇のイメージとはあまり違うような感じで、本当に東京のIT企業みたいな感じの雰囲気です。そういった形で、本委員会の視察団に対しても、ほとんど変わらないぐらいの人数がずらっと前に並んでいただいて、もう何でも答えますという形で対応していただいたのは印象的でした。

若松競艇も、これからいろんなイメージを変えていくという部分でいけば、大村競艇のように若い職員さんとか、通常そういうところに行かないような人たちも含めて人事の部分でも強化していったら、本当に競艇場と思えないような感じなんですけども、そういう部分での人事的な配置とかも必要なのかなと。大村市では、むしろ北九州市でいったら、いけいけの部局に異動するみたいなイメージで、競艇場もそのような形でいろんな人材を広く集めていくっていうことも必要なのかなと思いました。

それと、向こうの管理者の方のお話を聞くと、お客さんの声に対する回答であるとか、ファンの方、お客さんとの意見交換会もずっとされているそうなんですけども、これはもう全国に先駆けてやっていますと。これについては、大村競艇として、この部門をしっかりと取り組んできたことに対する誇りというか、そういうのがありますというお話をされていました。ですから、先ほどもいろんな意見があったように、ファンとかお客さんに対する声にどう応えていくか。それに迅速に答えていくというスピード感、本当に民間企業みたいな感じの印象を受けましたので、北九州市もこれは参考になるかなと思っております。

それと、あと大村競艇の立地場所は、公園があり、スポーツ施設があり、市役所も近くにありますし、イオンとか、全体が非常に市民の憩いの場所みたいな形。ですから、大村競艇でも週末ごとにいろんなイベントをされているということでしたけども、エリア全体の魅力アップ

というところでも大きいと思います。若松競艇は、競艇場にはあるんですけど、その付近はそんな感じじゃないですし、しかし、一方では空いた土地もあるし、今後、若松競艇の周辺のエリア、例えば水辺で親しめる場所であるとか、トライアルはありますけども、周りにそういったショッピングセンターの誘致であるとか、全体の魅力向上も今後取り組めたら、あのエリア自体が非常にすばらしい場所になるんじゃないかと思っております。

一方、大村市の方が言われていましたけども、北九州市のパーク化の取組は、非常に規模が大きいと、大村よりももう数倍あるということでは言われておりました。ですから、北九州市のパーク化の取組というのは、大村競艇さんも非常に注目されているという印象で、北九州市はあれだけの規模感でやるという部分での、ぜひ何としても成功させていきたいなということをおもいましたし、そういう部分ではよきライバルというか、本当にいろんなことも教えていただきましたので、いろんな視察の方が若松競艇に来られたときには、ぜひしっかりとおもてなしをしていただけたらと思います。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） 大村の感想ですけども、まずは市の財源にボートの収益が物すごく寄与しているというのが一番印象的でした。そのお金を使って、福祉政策とか子供とかパークとかも、まちづくりの整備が大分進められていて、道路も非常に幅が広くてきれいでしたし、そういったことができているというところで、財源の存在というのはすごく大きいんだなということを改めて感じた次第です。実際、大村市が50年間連続で人口が増加している町ということでしたので、そういったところに寄与しているのかなと。当然、長崎市もほどよい距離感であるとか、平野があってまだ人が入ってこられる余地があるとか、いろんな複合的な要因はあるのかとは思いますが、その中でボートの収益を使って、また今度市役所も建て替えるという話もおっしゃっていましたので、財政に与えるインパクトが非常に大きいというところと、翻って北九州市もやり方の工夫を、すみません、どうすればいいとかまでは分かりませんが、そういった形でもっと稼げる可能性というのものもあるのかなと肌感覚として感じたという感想です。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 松尾委員。

○委員（松尾和也君） 私からも感想を言いたいと思います。

大村を見てきて、すごくよかったです。よかったんですが、北九州市がこれからパーク化していったら、遜色ないものができるだろうなという思いはありました。大村独自のものとして、発祥地であるということ、これがある種シンボリックで、ここだけはもう追い越すことはできないんですけども、北九州市は、より大きな規模で話題性にもなるというので、さらに長年信頼を積み重ねていくことで、年々利用者は増えていく見込みがあって、十分追い越せるんじゃないかなという手応えを感じて、せん越ながら帰ってきました。

他の委員からもあったんですけど、視察の対応がすごく丁寧でよかったなと思ったんです。

帰ってきて、大村の視察どうだったって聞かれたら、いや、もう大変すばらしいレース場だったって僕たちも言うと思います。北九州市も視察が来たときには同じように受け入れて、よかったよって誰にでも言ってもらえるような対応をしてほしいなというのがありました。すごくいい視察となりました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 三宅委員。

○委員（三宅まゆみ君） もう皆さんがおっしゃっていただいていることを全て私も感じたところではありますが、それに加えて、市の財政に、大村市の財政に非常に寄与しているだけに、職員の方が必死で働いているというのがもうひしひしと伝わってまいりました。ある種、命がけで頑張っていますと。特にここは一番最後までボートがあっているということで、夜遅くまでの勤務ということもあって、もちろん働く皆さんのルールを犯してうんぬんということではなくて、その思いといいますか、とにかく自分たちでこの町を守っていくぐらいの思いでやっていらっしゃるというのが非常に言葉の端々で伝わってきました。北九州市の職員の方も一生懸命頑張らせていただいていると思いますけれど、その必死さみたいところがさらにまだ余力があれば、もっともっと北九州市も伸びていくだろうなと思いましたので、感想でございます。

○委員長（渡辺修一君） ありがとうございます。私からもいいですか。ここで副委員長と交代します。

（委員長と副委員長が交代）

○副委員長（三宅まゆみ君） 渡辺委員。

○委員（渡辺修一君） 今委員の皆さんからお話がありましたとおり、すばらしい施設でありました。ただ、規模感でいうと、若松ボートは全然負けておりませんし、パーク化も、大村から、北九州市の若松ボートのほうがもう数倍すばらしいパーク化になると思いますという声もいただきましたので、そこはしっかりと大村の視察も受けて、我々もこのパーク化が大成功するよう進めてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○副委員長（三宅まゆみ君） 委員長と交代します。

（副委員長と委員長が交代）

○委員長（渡辺修一君） ほかになければ、次に、マリンポートかごしまのクルーズ船の誘致施策について意見交換を行います。

マリンポートかごしまでは、鹿児島港の役割及びクルーズ船誘致の現状や課題等について調査しました。意見、提案等があれば発言をお願いいたします。大石委員。

○委員（大石正信君） 鹿児島島のクルーズ船の事業も、あまり北九州市には参考にならないかなと。歴史的に江戸時代末から明治にかけて密貿易とかをやっていたと、非常に歴史的な条件が一つ大きなものがあると思います。

それと、地理的条件についても、観光資源が非常に多いということで、外国から来られた方々

についてもいろいろ見るところがあったりとか、また、離島というか島国にずっとクルーズ船を広げていったりということで、中国から来た人たちなんか案内したりとか、ヨーロッパ人も案内したりと言われていました。

それと、驚いたのは、151回、全国で5番目ということで、巨大な施設を整備されていると。マリポートかごしまで、22万トンのクルーズ船が接岸できるということで、そういった地理的な条件、歴史的な条件もあるから、北九州市でそれをそのまま生かせるかなとはなかなかないかなと思いましたが、観光資源として外国人を呼び込んでいくという形で一生懸命やられていると。タクシーに乗ったら、タクシーの運転手さんも、鹿児島県の西郷どんのことも含めて、何かバスガイドがしゃべっているぐらいの、しっかりと運転手さんも話されるような感じで、町を挙げて観光客を応援しているなということがイメージとして思いました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） ほかにありませんか。上野委員。

○委員（上野照弘君） 改めて鹿児島港の視察をさせていただいて、あくまで今回はクルーズ船の受入れについてという観点から視察させていただいたわけでありすけれども。鹿児島港は、本港区、新港区、鴨池、中央、谷山一区、二区、浜平川というんですか、何か港の使い分けがきれいに確立しているなと感じた次第であります。鹿児島港と北九州港を比べてみると、門司港があって、ひびきがあってということであるんですが、何か北九州市は港の使い方がまとまりがないのかなと感じた次第でもあります。そう考えますと、ひびきの水深15メートルというのはもったいないな、もっと活用できるのになと思いつつながら、マリポートかごしまで勉強させていただいたわけでありす。これからは我が市はクルーズ船の誘致を進めていくわけでありすけれども、以前と打って変わって今年状況が大きく変わったのは、洋上風力が乱立するあの中をクルーズ船が入ってくるということでありす。これは、もうクルーズ船に乗っているお客さんからしても、すばらしい景色の中、北九州市に着岸される。すばらしい景色を見ながら、また北九州市を後にするという状況になってこようかと思いつつ、ぜひそういうロケーションもPRしつつ、これからはさらに港の充実を図っていただきたいなと思いつつ。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 井上委員。

○委員（井上しんご君） 鹿児島港を視察させていただきました。もともとは一般のふ頭というか、飼料置場とか言われていましたけれども、そこでクルーズ船を誘致したということが始まりだったと聞きました。そこで、経済界のちゃんとしたところでおもてなしをしたい、迎えたいということで、港湾の専用ターミナルの建設が始まったということでした。今、鹿児島港では、県のターミナルとは別に、民間船会社が出資してターミナルを造るということで、そういった連携をするところが全国に幾つかあるそうで、北九州市は、市のターミナルというのは多分ないと思うんですけれども、今後こういった民間船会社と連携して民間資金を投入する形でのターミナル建設というのも可能じゃないかなと思いつつ。これは、もう募集が終わっているのか分

かりませんけども、市で整備するというのがなかなか財政的に厳しいのであれば、そういった民間投資、それは大きい船から小さい船、ヨットまで含めていろいろあると思うんですけども、ぜひ、そういったいろんな船のサイズに応じた形で、マリーナとかクルーズ船とか、大規模、小規模、中規模という部分での分け方で、民間を呼び込むというか、市がこういうエリアを指定して、ここでそういったふうにできますよという部分での民間投資と連携ができるんじゃないかなと思いました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） 先ほど大石委員が言ったように、過去の歴史の中で、当初は青年会議所でしたか、青年会議所からの提言で始まって、もうそれで30年ぐらいずっとクルーズのことを取り組んでいる中で、ターニングポイントみたいな話は具体的にはなかったとは伺っているんですが、県の方針として、クルーズを最大限生かしていくんだというところで、大方針がまとまっているというのがすごく印象的でした。北九州市の港湾はどっちかという物流メインですし、空港も今物流をやっていくって話の中で、いわゆるクルーズ船という観点とかであまり全力でやってきていなかったのかなと、条件もあるんですけども、その辺の大方針をどうして東ねていくかというのが非常に重要だなと思いました。先ほど井上委員もおっしゃったように、民間投資を呼び込むという形をうまく使っているなというところで、欧米の船会社がお金を出して新しいターミナルを今度造るというような話。旧ターミナルも、見に行ったら非常に大きくて立派なものであったんですけども、どんどんクルーズ船のサイズが大きくなっていくと、それでも人があふれるんだというようなお話でした。ですので、今門司にあるターミナルを例えば改修して使おうと考えても、あれだと鹿児島港のサイズでいうと全然人が入り切らないんだろうなというのが感想です。

ですので、またあれをどこまで立派なものを造って、どうやって誘致していくかっていうことは当然考えていかなければいけないとは思いますが、それ以上に市の優先順位として、どこにちゃんとお金をかけて何の分野で取っていくんだというところをしっかりと決めないと、そんな片手間にやっても鹿児島みたいには簡単にはなれないというのが私の感想です。以上です。

○委員長（渡辺修一君） それでは、ほかになれば、最後に福岡国際空港株式会社の福岡空港の取組及び沖縄県的那覇空港における航空機整備事業及び路線誘致の取組について意見交換を行います。

まず、福岡国際空港株式会社では、福岡空港の現状及び国内線複合施設増改築工事の取組について調査いたしました。

この福岡空港の視察については、黒岩空港企画部長をはじめ空港企画課の皆様には福岡空港との調整をしていただきまして、大変ありがとうございました。感謝いたします。しっかりといろいろな御意見を聞かせていただきましたので、反映させていただきたいと思っております。

また、沖縄県では、航空機産業クラスターの形成及び路線誘致の取組等について調査いたしました。意見、提案等があれば発言をお願いいたします。大石委員。

○委員（大石正信君） 福岡空港であるような工事がされているとは私は知らなかったんですが、行ったときに大きな駐車場があって、そして、その隣に複合施設を建設していくということで、5階から11階までホテルを建設し、商業施設を建設すると。それも、インバウンドの客が通過するようなところに商業施設を造っているらしくて、天神とか博多駅にも対抗できるような施設を空港に造っているということで、ちょっと驚きました。それがなぜできるかというのは、1,800万人ですか、利用客が多いし、アクセスもバスとかタクシーとか、地下鉄も今度七隈線から直結するようになったりとか、都市高速道路も直結できるようになっているという、とにかく日本で一番便利な空港と。だから、北九州空港に何か参考になるかと言われると、なかなか参考にならないんですけど、そういう巨大な空港建設が進められているというので驚きました。インバウンド客が陰りも出てきているという状況があるので、ちょっと大丈夫なのかなという不安材料もありました。

あと、沖縄について驚いたのは、北九州市と比べて製造業がないということで、県を挙げて空港関連の技術者、高校とか専門学校を卒業した人たちを育成している。県外に流出しないような形で、空港のところに建物を建てて、それを民間会社に貸してするという形で、若者をどう育てていくのかということ、観光だけじゃなくて、そういう空港整備のために県を挙げてやっているというのは非常に驚きでした。だから、何かまだ分からないですけども、そうやって力を入れてやっているということを北九州市も考えていく必要があるかなと思いました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） ほかにありませんか。富士川委員。

○委員（富士川厚子君） 福岡空港は、パースみたいなのを少し見せてもらったんですけど、本当に何か韓国の町みたいな、旅する空港というコンセプトで、お店も今の3倍以上は入るということ言われていました。ここにソラリアホテルも入るということだったので、ますます福岡空港を利用される方が増えるんじゃないかなとも思いましたし、いつも北九州空港の現状を聞くと、いつも、いや、コロナ前には戻っていませんという答弁ですけど、福岡空港は全然コロナ前を超えていますという答弁をいただいて、超えているんだと思って、どこも超えていないと私も北九州空港で洗脳されていたなというのを福岡空港へ行って思った次第なんですけど。福岡空港は福岡空港でいいところもあるし、北九州空港も北九州空港で本当に皆さんの足にしっかりなっていると思うんで、北九州空港も何か旅する空港じゃないけど、福岡空港はこれから買物に行くこともできるし、食事にも行こうとなると思うんですけど、北九州空港、貨物も大事なんですけど、来た人がどう空港で楽しむかという時間の使い方がなかなか、足湯もない、とにかく座って待つしかないみたいな空港かなというのがあるんで、何かもうちょっとわくわくするような空港になっていただきたいなと、福岡空港と同じになることはないです

ど、北九州空港らしい何かがあってもいいかなと思いました。

沖縄も、さっき大石委員も言われていましたけど、人材育成というのにすごく力を入れていたのと、那覇空港は結構利用者が多いですけど、沖縄県から旅行に行く人はほとんどいませんと言われていて、だから全部外から、海外と国内から来る人でこれだけの利用者があるって、それはそれで逆にすごいなと思ったんですけども。本当に空港はそれぞれ特色があるなというのを改めて思いましたし、じゃあ北九州空港はビジネス空港と昔は言われていたけど、もっと観光で何かできるんじゃないかなとも思った次第です。以上です。

○委員長（渡辺修一君）ほかにありませんか。井上委員。

○委員（井上しんご君）先ほど話があったように、福岡空港は店舗数を増やして、旅をするというよりも空港に行くことを目的にするようなものに変えていくというお話でした。以前、北九州空港のターミナルビルも、空港を目的に捉える方という部分でも、多分市も取り組んでいたと思っています。そして、なかなかそういう感じには難しいと思うんですけども、以前この委員会か別の委員会かもしれませんが、港湾空港局の部長が空港島にこれからショッピングセンターの誘致とかも研究していくみたいなお話があったときもありました。今、なかなかいろんな貨物の施設とかも随分できましたし、土地もたくさんあるような感じでもありませんし、今後埋立てとも並行しながら、そういったショッピングできるような場所の誘致であるとかホテルであるとかという、本当に空港島に楽しみに行くような部分で、ターミナルだけでそこを目的にというよりも、その周辺エリア、公園とかもあっていいと思うんですけども、そういうのもぜひ取り組んでいく必要があるのかなと思いました。

あと、苅田町側の土地も未利用地などを活用し、県とも相談しながら、空港島全体の魅力アップというか、空港島に遊びに行けるような感じで、ぜひ研究してもらいたいなと思いました。

それと、沖縄の航空機関連産業クラスターの集積という部分で、北九州市はまさしくものづくりの町で、沖縄は全くそういう工場もないという状況から、一から整備という部分では人材育成がしやすいという部分だと思うんですけども。北九州市は、そういった部分ではあらゆる産業が集積している場所でもありますし、本当にこういう部分での強みがあると、24時間空港ということもありますし。しかし、現地に行ったら、すごく大きな、もう飛行機が何機も入るような倉庫の中で整備をされているということで、現状北九州空港にこれだけの倉庫を造るような場所も多分ないですし、ここも土地の利活用ということも含めて、国との協議もあると思うんですけども、北九州空港の24時間空港という部分をフルに生かせる活用というのはまだまだ可能性があるなと感じました。以上です。

○委員長（渡辺修一君）ほかにございませんか。三宅委員。

○委員（三宅まゆみ君）皆様におっしゃっていただいたんですが、まず福岡空港については、すごい格差がついたなというのが正直な印象でありました。ただ、飛行機に乗らない人も集客をするという意識が非常に強くて、とにかくいろんな人が集まる場所にまずはしようとしてい

るなど感じました。同時に、ハワイ便が、11月で福岡空港から国際線直行便がなくなっているんです。それについてもお尋ねをしたら、今は円安でアウトバウンドが非常に弱いということで、結果的にその路線がなくなっているということでした。アウトバウンドは大事だなと思って、この円安の中でどれだけ皆さんが海外に行きたいとか、もちろん国内路線も乗ってもらうためには、旅行に行きたいと思えるようにするというのも非常に重要ではないかなと。もちろんお金のことは、大変大事で、今高いからなかなか乗ってなくても、この10年、15年前ぐらいまでは本当に円が高いときは皆さん若い方たちも休みを利用して海外にたくさん行ってらっしゃって、それが今はもう全く行けないような状態になっている。だけど、まだアジアの一部は少し低価格でも行けるような場所が結構あります。そういったものに少し場所を絞ってアウトバウンドをどうつくっていくかということも新しい路線誘致には必要なんじゃないかなと、逆に福岡空港のハワイの減便というか、ハワイの直行便がなくなって、そんなふうにも感じました。

それと、路線誘致をする際に、最近の中国の様子なんかを見ていると、何となくちょっと心配だなと。正直、空港新規路線の関係で、中国の路線を例えばいい関係で誘致したとしても、国との関係でいきなりばんと切られてしまうというようなこともあるなと思ったりもしました。そういった影響がないところを中心に、アウトバウンドも含めて何か少し絞ってやっていくということも大事なのかなと思いました。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 上野委員。

○委員（上野照弘君） 空港のことでもありますし、経済港湾委員会の視察の感想として、簡潔に福岡空港と沖縄を見た感想を述べたいんですけれども。福岡空港の新しいターミナルビルの総合施設の説明を受けて、また北九州空港と差が開いてしまうなと率直に思ったのと、あと沖縄に行って航空関連産業のクラスター形成というお話を伺いながら思ったのは、かつて北九州市もMR Jを誘致して産業をとということがあったんですけれども、その計画はなくなったわけで、もう時代は変わってきましたから、現在の北九州市のホームページを見たら、MR Jという言葉が載っている現実もあるから、そういったところをリフレッシュして、時代に沿ったものを我が町も目指していくべきじゃないかなと思います。

それと併せて、沖縄県に行っても思ったんですが、県との連携というのは絶対に必要不可欠だなと思いますので、我々、政治の側も県との連携というのを大切にしながら、北九州空港のことを考えていきたいなと思った次第であります。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） 今上野委員がおっしゃったようなことで、本当に県との連携というのは、特に航空、基本的には国管理空港という形になると思いますので、国、県との連携をどうやってしていくというのが、まず何をすることも避けては通れない部分だなというのを改めて感じたというのが1点あります。

福岡空港、那覇空港、それぞれお話を聞いて、もうちょっと物流の話を知りたいんですけど、そっちの担当者というわけではなかったの、どちらかという旅客の話を中心で伺ってきた形になります。福岡空港は、町なかだからこそ時間制限がある、北九州空港みたいに24時間できないという中で、その時間の中で自分たちの売上げを最大化しようということで、町なかの強みを生かして、今回新しいターミナルというか、施設を建てようという戦略なんだということをお聞きしました。これができる一つの理由としては、コンセッション方式という形で、民間がかなり前向きに取り組んでいるという背景もあるということでもありましたし、福岡空港と同じことを北九州空港はする必要はないんだろうなとは思っています。だから、逆に福岡空港ができないことを北九州空港は見つけながらやっていかなければいけない。そこで、物流とかの話になるんだと思うんですけど、そっちを最大化していかなければいけないなというのを改めて感じたところです。

那覇空港の話では、アウトバウンドが少ないというのが一つの大きな課題というふうなことではありました。沖縄の方は特に観光業に従事されている比率が高いというのもあって、逆にそういったときにはお客さんを迎える側なので、自分たちが遊びに行く暇がないと。そういったところでラーケーションとかを使いながらやっていきたいと思いますという新しい動きも出てきているというお話も伺いました。あとは、積極的に海外のLCCとかを含めての誘致に飛び回っているということでした。直近、オーストラリアかどっかでやっていたコンベンションにも参加して、そしたら、行く先々に大体福岡空港がいるみたいなことをおっしゃっていて、北九州空港はいないですかと聞いたら、そんな毎回ではないですみたいな感じだったので、その辺の営業の動きというのも少し関係してくるのかなというのを改めて思いました。那覇空港は、物流戦略をやっているんですけど、これもコロナで一時期うまくいなくなっているというところは伺ったんですが、もうちょっと掘り下げて聞いてみたいなところがある、今のところ聞けていない状況なので、改めて調査していきたいなと思っています。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 松尾委員。

○委員（松尾和也君） 福岡空港の感想なんですけど、新しい複合施設の絵姿を見て帰ってきました。もうこれでいよいよ本当に羽田空港に迫るような魅力ある空港になるんだろうな。同じ県にある空港ですし、喜ばしいなと思うんです。それを見て帰ってきて、北九州空港でも利用者に見合った今後の投資というのをやっていかななくてはいけないな。新しい福岡空港のあの施設というのは、旅行で来た人が例えば2泊3日とか3泊4日に来て、最終日ちょっと旅疲れなんかもあって早めに空港へ行こうと、そういう人はかなりいますよね。そういうときにまたお金を使える場所があるというのは、チャンスを取りに行ったんだなと思いますし、北九州市も何かマッサージ屋とかそういうのがあるだけで、ちょっと早く行ってマッサージでもしてもらおうかとかができると思いますし、北九州市の魅力というのは羽田からの遅い便があることですね。羽田から帰ってきて、遅い便だと午後11時とか過ぎるんです。11時とか過ぎたとき

に、それから都市部に移動して御飯とかも難しいような時間になるじゃないですか。そのときに空港に何か遅い時間だけやっているラーメン屋でもあれば面白いんじゃないかなとかと思って、そういうのだったらやりたいという人は結構いらっしゃるんじゃないかなと思うんです。何かそういうのをやられたらどうかなって思いました。大変参考になりました。ありがとうございました。

○委員長（渡辺修一君） ありがとうございます。ほかに意見がなければ、今日たくさんの御意見をいただきました。若松ポート、また、クルーズ船、北九州空港、どれもポテンシャルを秘めたところでございます。これからの所管事務の調査にしっかり生かしてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

以上で行政視察後の意見交換を終わります。

ここで、次の議題に関係する職員を除き、退出を願います。

（執行部入退室）

次に、地域経済の成長とにぎわいの創出及び農林水産業の活性化についてを議題とします。

人材不足を乗り越える官民対話テーブルについて、報告を兼ね、当局の説明を受けます。雇用・産業人材政策課長。

○雇用・産業人材政策課長 人材不足を乗り越える官民対話テーブルについて説明させていただきます。

それでは、1ページを御覧ください。まず、長期的な推移を確認するため、北九州市の雇用情勢について説明いたします。

初めに、北九州市の有効求人倍率の推移についてでございます。

有効求人倍率とは、求職者1人当たりには何件の求人があるかを示すもので、有効求人倍率が1を超えると人材不足感が大きく、1を下回ると人材不足感が小さいと言えます。市制発足時からの推移になりますが、鉄冷え、バブル崩壊、リーマンショック、新型コロナなどの影響を受けまして、倍率が急激に低下し、その後回復するといった動きが続いておりますが、令和6年度では1.12倍となっている状況でございます。中段です。職種別に見ますと、建設業、介護サービス業、輸送・機械運転業の人材不足感が高い一方で、事務職、運送・清掃等、販売業が低い水準にあります。

続きまして、福岡県の失業率の推移についてです。

こちらでもデフレ不況やリーマンショックなどの影響がございましたが、長期的には低下傾向でございます。令和6年度には2.9%まで低下しております。

2ページを御覧ください。本市の就業人口についてでございます。

平成27年に41万5,000人でしたが、令和2年には約40万人ということで、約1万5,000人減少しております。着目すべき点としては、グラフ中の赤枠の箇所を御覧ください。25歳から44歳の減少が顕著ございまして、約2万7,000人減少しているところでございます。その一方で、

45歳から54歳までは約5,000人の増加、70歳から79歳までは約1万1,000人の増加となっております。

続きまして、就業支援施設についてでございます。求職者を対象に、就業相談や職業紹介など、各層に応じた丁寧な就業支援を実施するため、北九州市では5つの就業支援施設を運営しているところでございます。

3ページを御覧ください。こうした中、北九州市といたしましては、若者の定着や企業の人材確保を強力に推し進めるため、地域力で人材確保アクションを始動させまして、その一環として今回人材不足を乗り越える官民対話テーブルを開催いたしました。テーマにつきましては4つございまして、若者の採用や定着、女性、シニア、外国人などの多様な人材の活躍、副業、スポットワーク、テレワークなどの多様な働き方、DXなどの生産性向上を課題といたしまして、出席者につきましては、北九州商工会議所などの経済界や業界団体をはじめといたしまして、中小企業の経営者、大学生など多様な参加者が一堂に会し、課題共有や意見交換を計5回実施いたしました。

次に、5のいただいた主な意見、アイデアなどにつきましては、記載のとおりでございます。

続いて、4ページを御覧ください。次に、6、対話テーブルで得た新たな気づきについてでございます。

4回の会議を通じて、重要な着眼点となる気づきにつきまして、第5回目の会議の中で提言がございました。1つ目は、働きたい人の希望、不安に寄り添っていたかという点でございます。これまで企業側の目線で人材確保支援を実施しておりましたが、求職者が求める情報や支援に焦点を当てた施策が必要ではないかということでございます。

2つ目が、働きたい人の共感に焦点を当てていたかという点でございます。働きたい人が北九州市や企業での未来を想像できる情報やライフステージの変化に共感し、寄り添う仕組みが必要ではないかということでございます。

続いて、5ページを御覧ください。3つ目が、求職者目線の施策を意識していたかという点でございます。社会の変化に応じた多様な働き方への対応や様々な属性の人が自分らしく働ける環境整備など、求職者の視点での取り組みやすさが必要ではないかということでございます。

続いて、7、令和8年度のパイロット事業案についてでございます。先ほどの3つの気づきを踏まえまして、企業目線だけではなく、求職者目線を第一に考えるジョブシーカーファーストの視点で以下の3つの事業を立案いたしました。

1つ目は、メディア強化についてでございます。市内で働く人の1日密着動画やインタビューなど、この町で働く、この町での仕事をイメージできる動画コンテンツを制作し、市公式SNSなどで発信することにより、さらなる人材の発掘を図っていきます。

2つ目、コミュニティ形成についてでございます。働くことへの不安や課題を抱える求職者であったり、人手不足に悩む地元企業の経営層を対象といたしまして、互いに交流や対話を

深めることにより、悩みや課題の共有を図り、働くことの意識改革や成功事例の横展開を図ります。

3つ目は、人材バンクコンソーシアムについてでございます。求職者の開拓から面談、適性検査などのキャリア形成支援、リスクリングなどの導入教育、市内企業への長期有償インターンなど一気通貫の手厚い伴走支援を行いまして、ミスマッチのない正規雇用へつなげてまいります。

最後に、6ページを御覧ください。北九州市は、ジョブシーカーファーストを基軸といたしまして、先ほど述べました3つの戦略を相互に連携させ、官民連携の下、人と仕事が巡り会い、循環する町を目指すべく、施策を図ってまいりたいと考えております。

説明は以上でございます。

○委員長（渡辺修一君） ただいまの説明に対し、質問、意見を受けます。なお、当局の答弁の際は、補職名をはっきりと述べ、指名を受けた後、簡潔、明確に答弁を願います。

それでは、質問、御意見はありませんか。大石委員。

○委員（大石正信君） 人材不足を解消していくということで、官民対話テーブルができたということですけど、議事録がまだできていないんで、一応さっき言われた中では、利用する働き手の視点ということが大事だと、どういう人たちがどういうことを求めているかというようなことを言われたけど、議事録の中身というか、どういう議論になったかというポイントがあれば最初に教えていただきたいんですけど。

○委員長（渡辺修一君） 雇用・産業人材政策課長。

○雇用・産業人材政策課長 官民対話テーブルの中身といたしましては、学生も入ってございまして、求職者の目線でいきますと、学生の方は特にDXとかいろいろ対応できるような教育を今いろいろと受けている中、自分たちが学んだことを生かしていきたいという企業さんを探している状況という声もございました。デジタル化が進んでいない企業とかもあるんですけども、そういった中でも挑戦させている企業というところが、求職者としてはそういう視点も必要みたいなことを言われておりまして、企業の出席者の方についても、そういった視点というので、経営層を含めてマインドセットしていくということもございまして、企業側が人材を採るということではなくて、人に、求職者に選ばれる企業にというような視点でということが議論の中でも出ました。以上になります。

○委員長（渡辺修一君） 地域経済振興部長。

○地域経済振興部長 ちょっと補足でございます。

一口に求職者といっても、女性がいらっしやったり、高齢者がいらっしやったり、外国人、それを一くりにするんじゃなくて、もうちょっと解像度を上げる必要があるんじゃないか。手を差し伸べるにしても、もうちょっといろんな高齢者もいるよと、そういった御意見もございました。

あと、第二新卒、大卒は直接市内に残ってもらうのがベストなんですけど、なかなか厳しいよねと。でも、関東等に出て行って帰ってきたい、U・Iターンしたいという、そういった方は一定数いるんじゃないかと、そういった話題もございました。

あと、そういう方、もしくは、学生等がこの町でどうして働いたらいいんだろうか、そういうイメージをしっかりと伝えることが重要じゃないか、その辺が足りていないんじゃないかと、そういったこともございましたので、補足でございます。

○委員長（渡辺修一君） 大石委員。

○委員（大石正信君） 大変重要な視点だと思います。要するに、ここで働いて残っていききたいという人たちの視点がどうなのかということは今までにない発想だと思うんですけど。

1つお伺いしたいのは、今、産業未来戦略で雇用者報酬500万円っていうのを掲げていますよね。この議事録の中にあるやつは、製造業が今3,971人減っていると。医療従事者が2,357人、医療や介護、福祉で働くケア労働者が増えていっていると。しかし、残念ながら、ケア労働者の年収が500万円だと。それが15%から16%と。製造業で働いている方々の年収は非常に高い、所得が高いということで。北九州市が半導体とかロボットだとかAIだとか、それを掲げていますよね。だから、何を戦略にして、どういう形で進めていって、北九州市が活性化していくのかと、そこら辺については、今までケア労働者についての視点みたいなのがなかったので、そこら辺はどう考えているのか。そこをお聞かせいただきたいんですけど。

○委員長（渡辺修一君） 雇用・産業人材政策課長。

○雇用・産業人材政策課長 介護分野における人材の確保というところで、官民対話テーブルにおきましても、業界団体の方で建設業、介護ということで人材不足感が大きい団体にも来ていただいてお話を聞いております。資格取得のハードルというところもございますし、とはいえ、そもそもの人材が不足しているという状況もございますので、我々としては、そういった資格取得の支援等もございますし、そういったマッチングというところも行いたいと思います。今パイロット事業案で説明させていただきましたが、人材バンクコンソーシアムで、求職者の開拓ということで、もともと働いていない潜在層の方の掘り起こしからまずスタートさせまして、その方たちをしっかりと導入教育ということで支援をしていくと。それで、有償インターンシップにつなげて、正規雇用へみたいなの、そういったスキームも現在考えておりますので、そういった部分にも併せて、介護業界だけではなくて、市全体の人材不足の部分については解消できるように努めていきたいということで考えております。

○委員長（渡辺修一君） 大石委員。

○委員（大石正信君） 保健福祉子ども委員会の所管となるから、一概にどうするかというのは見えてこないと思うんですけど。もう一つ、資料を読ませていただくと、DX、デジタルについて、手をつけていないというのが16.4%、行わないといけないというのは38.2%、合計で54.6%の人がDXやロボット、デジタルについては、企業がそれを考えていないというアンケートが

出ていますよね。だから、そういう中でこれまでずっと問題にしているのは、賃金を上げてほしいと、それに対して助成してほしいということで、生産性向上が必要なんだ、AIだということもずっと言われていますよね。だから、実際にはそのかい離がありますよね。実態としては、サービス産業とかそういうところでAIとかロボットだとかは関係ないみたいなことになっているんだけど、そのかい離がありますよね。そのあたりはどのように考えていますか。

○委員長（渡辺修一君） 中小企業振興課長。

○中小企業振興課長 AI、DX施策戦略と、実際の雇用のミスマッチ、特に業界におけるミスマッチがあるというところで、御指摘のとおり、例えば建設業とか医療、介護とか、DXがなかなかなじみにくい部分もあります。実際に手作業しないといけないという部分はあります。一方で、バックオフィス部分、例えば人事、給与、会計とか、そういったところは、各業種必ず必要なデジタルトランスフォーメーションというのはあると思います。1つは、バックオフィス部分、たまに守りのDXということもあるんですけど、とにかく効率化すると、経費を下げるというところで賃上げの原資を稼ぐと。もう1つ、フロントオフィスということもあるんですけども、そこで集めたデータをどう次の売上げにつなげていくのかと。そこで、例えばいろんな消費者の傾向が分かると。じゃあ、それをどういう商品につなげようとか。あるいは、建設業でいうと、人手不足だということ、じゃあAIを使って、新しい人が入ったときに、新しい人に現場で一々レクチャーしなくてもリモートで事務所にいるベテランが指示できるような取組とか、いろいろ工夫の仕方はある。でも、なかなか全部が全社に行き届くのも難しいということもございますので、まずは業種ごとの特性も捉まえながら、やれる部分はどんどんお手伝いしていきたいと思っております。ひびきのに相談窓口を設けておりますので、これは例えばホームページの制作から、非常に奥深いDXの深いところまで御相談いただけるように体制を取っておりますので、ぜひ一度御相談をいただいて、その業界特性に応じたデジタルトランスフォーメーション、デジタル化も含めてお手伝いできればと思っております。以上でございます。

○委員長（渡辺修一君） 大石委員。

○委員（大石正信君） 先ほどの議論の中で、私たち委員で沖縄に視察に行ったんです。そこで感じたのは、沖縄は製造業がないということで、空港関連の人たちをどう育てていくのかということで、高校を卒業した人たちが県外に行かないように、そういう学校を県が支援したり、そして、空港には格納庫を造って、県が建てて、民間事業者が利用されているということをおっしゃったんですけど。そういうふうに、高校生、工業高校の学生さんも非常に少なくなってきた。しかし、一方では半導体とか自動車関連産業だとか、求められるものはありますよね。だから、北九州市が何を戦略にして、どういう形で雇用を図っていくのかと、そのあたりがしっかりと焦点が定まっていないというか、いろいろあるのはありますけど、そのあたりはどんなふうにして人材を確保して、北九州市はこれをやっていくんだとかというのはあるんでしょう

か。

○委員（大石正信君） 産業経済局長。

○産業経済局長 今回の御質問でありますけれど、基本的には北九州市はもともとのづくりの町でもあるので、今おっしゃったような製造業とか次世代自動車業者もろもろ、そこはしっかり進めていきますし、先ほど大石委員からもお話がありましたとおり、付加価値も高くて給料水準も高いんです。そこは引っ張っていってもらおうという意味では非常に重要だと思っています。

一方で、医療、介護、建設。建設は結構給料は高いんですけど、人手不足感は同様にきついですけど、ここもいわゆるコロナのときによく言われていましたけど、いわゆるエッセンシャルワーカーと呼ばれている人たちは、ある意味、北九州市にいてももらわないと困る人たちなんです。我々、製造業をもちろん頑張りますけど、極端な話、製造はどこでもいいわけで、日本全国、もっと言えば世界中どこでも構わないわけですけど、エッセンシャルワーカーの皆さんは、私たちの生命とか安全とかそういったものを守っていただいているわけですので、絶対に北九州市で働いていただかないと困るわけです。そういう意味では、市として、何とかいろんなことをやっているわけですけど、医療、介護の話をする、これはもうすみません、釈迦に説法で皆様のほうがよく御存じだと思いますけど、そもそも保険制度という前提の中でしていますので、なかなか民間みたいに付加価値を上げて給料を上げようみたいな世界じゃないというのは一定程度あるわけです。その中で、今、保健福祉局が介護DX、ITというような形で生産性を上げようと。できるだけ1人当たり多くの方をケアできるみたいな仕組みにしないと、これはこれから日本という国は立ち行かないんじゃないかと。例えば、すみません、ちょっと大きな話になりますけど、私はひのえうまの生まれで、ちょうど私が生まれた年というのは出生数が150万人を切っていて、結構大騒ぎになったらしいんです。当時、僕の後ぐらいの第2次ベビーブームの頃は200万人生まれていたんですけど、今もう70万人しか生まれません。それを考えると、先ほどDXの話が出ましたけど、いや、もうDXをやりたくないからやらないとかという時代はもう既に終わってしまっていて、これはもうDXにチャレンジしない人は、我々は一生懸命支援させていただきますけど、恐らく生き残ることも難しくなるんじゃないかと思っています。だから、そういう意味では、そういうチャレンジする企業を私どもとしては一生懸命応援をして、成長してもらって、高い給料を払ってもらおうという好循環を生んでいくということですので、業種的には製造業に引っ張っていただくんですが、もちろんそういうほかの業種だってしっかりDXに取り組んでいただきたいという、基本的にはそういう考えで進めていきたいと思っています。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 大石委員。

○委員（大石正信君） 分かりました。そういう稼働年齢層が減っていく、人口が減っていく中で、デジタル化は避けて通れないと。一つ言いたいのは、私のマンションに静岡から北九州市

に、病気になって、いい病院があるからというので移り住んでこられた方がおられるんです。だから、そういう方もおられる。そして、医療、介護、福祉関係で働く人も非常に多いですよ。だから、一つの産業として、資源もあるし、成り立っていると。だから、そこら辺についても、それは保健福祉局なんだということじゃなくて、きちんとそのことも戦略の中に位置づけていくと。しかし、そこでは実際には所得が低いという状況もありますので、北九州市で何を本当に、いろいろありますから一概には言えないんですけども、どういう形で市内総生産を引き上げていくのか、雇用者の給与を引き上げていくのかという焦点の定まった議論をしていただきたいということを要望して終わります。

○委員長（渡辺修一君） ほかにありませんか。上野委員。

○委員（上野照弘君） 人材不足というのは、もうめちゃくちゃ深刻であると思っていますし、その根幹は人口の減少だと思っています。先日も北九州市がついに90万人を切ったというようなニュースもあっていましたし、これはもうV字回復するというのはそうそう並大抵のことじゃないと難しいんじゃないかなと感じています。

また、今聞くところによりますと、市役所も若い職員が結構辞めて、民間企業に行っているというふうなお話も聞きます。一昔前だと、役所に入るといったら、僕も羨ましいなと思っていた時代もありましたし、役所に入れば安定してというところがあったんですけども、それ以外にも魅力がある企業が出てきた。企業が一生懸命人材を確保するために努力してきた時代にもなってきたんだなと思います。

先日、地元の中小企業の社長に挨拶に行ってお話をいろいろ聞きますと、今年は新しい子が4人入ってきたとか5人入ってきたとかというところがあって、社長のところはすごいですねと、これだけ人手が不足しているのに何でそうやって若い子が毎年毎年入ってくるんですかと聞くと、今いる若い子を辞めさせない努力を徹底的にするらしいです。若い子が例えば1年、2年とかで辞めていくと、その子からまた別の人に、あの会社は全然よくなかったというのがまたどっと広がって、負の悪循環になるそうなんです。だから、何が言いたいかということ、役所で若い人が辞めるというのは、市役所で働いてもみたいな風潮になると僕は本当に我が町にとってよくないと思うし、人材不足を解消するためには、まず中小企業をしっかり支えることが大切なんじゃないかなと、その社長の話を聞いて僕も思ったんです。

また、ある別の会社に行くと、積極的に学生を招いて、勉強会とか見学会とかをやっているんです。例えば、海の仕事では、こういう技術が現場で役立っていてみたいな、現場見学会みたいなことを積極的に大学なり高校生なりに向かってしていて、まず現場に興味を持ってもらう取組を、もう行政とかの力も借りずにやっていたりする会社もあつたりとかして、すごいなと思います。中小企業が90数%を占めているって、これは当然の話なんですけれども、そういった努力ができる中小企業もあれば、そんなところまで我が社は手が回らないと、もう今の現場をこなすので精いっぱいという会社もあるわけで、そういった余裕のない中小企業に余裕を

持って人材確保できるようにお支えをするのが行政の役目なんじゃないかなとも感じた次第であります。

そこで、今日御説明いただいた若者ワークプラザとか高年齢者就業支援センター、ウーマンワークカフェとか外国人就業サポートセンターとかU・Iターンオフィスとか、いろいろ市の窓口というのはあるんでしょうけれども、僕的生活エリア、人生のエリアが狭いのか分かりませんが、若松区における僕の身近な人たちの求職、仕事をちょっと探そうかねという人で、若者ワークプラザを使った人とか、ウーマンワークカフェ北九州で仕事を探してきたとかという人がなかなか正直、若松区の僕の身近なところにはいない状況であります。僕は30歳から議会にいまして、こういう世界で10何年いるんですけれども、正直なかなか身近な人はいなかった。でも、身近な人でいろいろ求職をするのに聞くのは、やっぱりハローワークなんです。ハローワークが一番身近にあってしまうのかなというのがあって、でもハローワークじゃ、登録はするものの、そこまで支援が手厚いとは思ってもいませんし、最低限のことはしてくれるところがハローワークなんだろうけども。若者ワークプラザはA I Mにある施設だと思うんですけど、それを分散化させるとかはできないのかなという質問をさせていただきます。例えば、機能を分けて、西と東にウーマンワークカフェを分散させるとか、高年齢者就業支援センターを分散させるとか。そしたら、より身近になって行って、活動しやすくなる雰囲気とかってできないのかなとちょっと思っています。

○委員長（渡辺修一君） 雇用・産業人材政策課長。

○雇用・産業人材政策課長 若者ワークプラザの担当になりますので、私からお答えさせていただきます。

若者ワークプラザは、小倉はA I Mに立ち上げておまして、黒崎にもございまして、一応その2か所での運営を行っております。以上になります。

○委員長（渡辺修一君） 就業支援担当課長。

○就業支援担当課長 高年齢者就業支援センター、ウーマンワークカフェについてでございますが、高年齢者就業支援センターは、戸畑区のウェルとばたの中に入っております、なるべく市内の全体からお客様を集めたいと考えております。

また、高年齢者就業支援センターには、実は国のシニアハローワークとかが同居しておまして、ハローワークと市の施設、また、県の施設等々が連携しながら、なるべくワンストップで就業支援を行いたいという形で運営しております。

ウーマンワークカフェは、A I Mの2階に1か所しかないんですけれども、八幡とか市内西部の方の来客が多少少なくなりますので、週1回、八幡西区役所で出張相談とかを実施しておまして、ブースを設けて対応しているところでございます。なるべく市内各区の方が訪れてもらえるように努力しているところでございます。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 地域経済振興部長。

○地域経済振興部長 補足でございます。今課長が答弁申し上げましたけども、とはさりながら、上野委員がおっしゃったように伝わっていないというところが現状かなと感じましたので、説明の最後にいろいろメディアを強化しますとか、今後コミュニティー形成をやっていきますとか、人材バンクコンソーシアムをつくりますとかというところに力を入れてまいりますので、今後も引き続きそれらに力を入れてまいりたいと思っております。

○委員長（渡辺修一君） 上野委員。

○委員（上野照弘君） ありがとうございます。例えば、若者ワークプラザ、ウーマンワークカフェ、サポートセンターの各区役所との連携というのはもうできているということですか。例えば、就業を求める人が区役所に行ったら、それだったらウーマンワークカフェにつなげますよとか、それだったら高齢者就業支援センターがあるからつなぎますよとか、つなげてくれるところは各区役所にあたりとかしますか。そもそも就業を求める人が区役所へ行きますかね。

○委員長（渡辺修一君） 就業支援担当課長。

○就業支援担当課長 まず、職を求める方は、基本的にハローワークが大前提だと思います。先ほど言ったウーマンワークカフェや高齢者就業支援センターにつきましては、ハローワークと同居しております。例えば、ウーマンワークカフェでいえば、国のマザーズハローワークと一緒に同居しております、なるべくワンストップで対応したいと思っておりますので、区役所にそういった御相談があれば、ハローワークや我々の施設を紹介していただきたいなと思っております。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 上野委員。

○委員（上野照弘君） もう最後ですけど、ぜひ求職者とかこういう市の支援施設の距離を縮める努力を引き続きしてほしいと思います。うちの事務所もお手伝いの女性が日替わりでパートさんみたいに来てくれるんですけども、多分知らないです。伝えても、そうなんだぐらいで聞き流されるというか。ぜひ、身近な施設であってほしいなと思います。以上です。

○委員（大石正信君） ほかにありませんか。菊地委員。

○委員（菊地公平君） 先ほど局長がおっしゃった認識というのは、本当に正しいんだろうと私は思っております。我々が若かった時代は、基本的には企業が強くて、仕事なんてなかなかなくて、何でも選ばず仕事しないといけなかった時代から、今は完全に求職者に主導権があって、自分がどういうふうな生き方とか働き方をしたいかで働き先を求めることができるように、もう大分時代が真逆になってしまったと認識しています。

そういったところで、先ほど上野委員からもあったように、ハローワークへ行くとか、そういった公共の施設に行って求職活動している方というのは、じゃあ実際どれだけ実効性があるのかなというのはちょっと思うところでもあります。というのは、結構、最近だとSNSを通じてお互いにこの会社はいいよとかそういった情報を交換したりしているというところがあり

ます。それが今回の計画の中でいうコミュニティーづくりなのかもしれないですけども。だから、市が関与できないところの、いわゆる一般の人たちの中のコミュニティーの中で仕事の話というの、今はもう交換されるような時代になってきているのかなと思っていますので、コミュニティーにどうやって市が関与していく、アクセスしていくかというところが今後コミュニティーづくりの中で課題かなと思っています。ですので、一般の人たちが勝手にコミュニティーをつくってやっているところに、市が何かやったからって、そっちに移ってくるかという、なかなかイメージできないんですけども、その辺のところに関してお考えがあればお聞かせください。

○委員長（渡辺修一君） 雇用・産業人材政策課長。

○雇用・産業人材政策課長 企業とのコミュニティーにつきましては、先ほどもお話がございましたが、各一企業ではなかなかそこまで手が回らないとか、人材不足でいろいろと検討する時間も暇もないというようなこともございましたので、令和6年度から、そういった地元企業の方が合同して、地域の人事部支援事業ということで学生の発掘であったり、学生がどういうものを求めているのかというところの学生との交流の場ということで、企業の方にも参加していただいて、今年度は21社参加をしていただいております。60名を超える学生が支援事業に入っていておまして、その方たちとの交流の中で、いかに求職者が求めているものは何なのかというニーズもしっかりと把握をしながら、いい人材もいればそこで採用につなげていくと、そういったコミュニティーの場も市としては支援をしておりますし、若者ワークプラザ御利用の方についても、しっかりとサポートをしながら、企業とのマッチングだったり紹介等を行っているところでございます。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） 今のお話を聞くと、新卒の話なのかなと伺うんですけど、そういうイメージでよろしいですか。であれば、いわゆる新卒が新卒だけで本当にコミュニケーションを取っているのかとは思ってまして、基本的に人は横のつながりと縦のつながりがある中で、大体縦のつながりで先輩とかから仕事を教えてもらうようなことがあると思うんで、横の部分だけをやってたとしても、第二新卒とか、その先へ行ったときにそことアクセスが全然できないんじゃないかなと今のお話を伺っていると思いました。その辺、何かあれば。

○委員長（渡辺修一君） 地域経済振興部長。

○地域経済振興部長 今、課長が答弁申し上げましたのは、令和6年度からやっている実例の一つということで、今後は、今菊地委員がおっしゃったように、縦、横、例えば経営者同士もあると思います。中小企業の経営者の皆さんが人を採れないので悩んでいる。その悩みを打ち明けられないんだよな、社長の右腕がないんだよって困っている、そういう方々もつなぐ。あと、実際に経営者の方々がそういう求職者の思いを直接聞くとか、そういった広い意味でのコミュニティー形成を今からやってまいりますけど、そういうふうな方向性、考え方でおりま

す。以上でございます。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） 分かりました。

すみません、あと2点ぐらい言いたいことがあるんですけど、さっきのコミュニティーの話もそうなんですけど、我々、仕事柄いろんな企業さんのところへ行くんですけど、行く先々で企業さんの受付の方をとっても、窓口の方の話とか挨拶の仕方一つとっても、全然違います。思うのは、すごく笑顔で朗らかでいい会社だなんて思うところもあれば、すごくもうびりびりしている会社もあって、率直に入った瞬間にここで働きたいとか働きたくないなって結構伝わるんじゃないかなと思っています。そういう意味では、なかなか保守的な企業さんの文化そのものを変えていかないと、最近の若い人に選ばれるような企業には到底ならない、そういう時代にもうなっていると思います。企業文化を変えるというところになかなか市が介入しづらい部分はあるのかもしれないんですけど、ただもはや、局長が言ったように、もうそんなことを言っていられない時代に今なってきていますので、DXにしないが54%あるという話もあった中で、なかなか体質を変えようとしめない企業さんというのはいずれ生き残っていけなくなるというのがもう見えているような形になってくるのかなと思います。そういった場合、もう一つの目線として、その後始末というか、企業が最後畳む、もしくは、売却する、そういった形の終わり方があると思うんですけど、そのみとりの部分で市が何かサポートできる部分というのは、やっていることを含めて確認させていただければと思います。

○委員長（渡辺修一君） 中小企業振興課長。

○中小企業振興課長 企業の廃業といいますか、事業譲渡ですとかそういったところのお尋ね、御指摘だと思うんですが、もともとは文脈的には、後継者がいらっしやなくて廃業せざるを得ないとか、せっかくお客様だったり、地域になじみがある事業者さん、お店がなくなるのは寂しいよねとか、せっかくその地域で育った企業さんが後継者がいないことでお店なり会社自体がなくなってしまうということ避けたいという文脈で、後継者対応ということで事業承継支援をしております。この中で、また近年M&A事業者もかなり増えたと認識しております。世の中の的に事業譲渡なり事業買収なり、そういったことが一昔前に比べるとかなり一般的になってきているという風潮も感じてございます。その中で、理由が後継者不足であったり、事業譲渡であったり、いろいろあろうかと思うんですけど、事業承継・引継ぎ支援センターというところが県にあるんですけども、そちらで登録していただいて、事業を売るとか買うとかというところの支援を、お互いのマッチングをしております。例えば事業承継をするに当たって、後継者探しをするところのお手伝い、北九州市は北九州市でのれん引継ぎプロジェクトというものをつくりまして、サイトでどなたか引継ぎ手はいませんかというようなお手伝いをしてみたりとか、あとは事業承継するに当たって、ただでというものもあれば、幾らかお金がかかるというところもありますし、会社の価値を算定するときに市役所で一部算定費用を助成

するとか、そういったところのお手伝いをしているというような状況でございます。以上でございます。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） 今、後継者不足のお話がメインで御回答いただきましたけど、多分これから従業員不足で廃業というのもどんどん出てくると思います。そういうわけでは、企業の枠を超えて事業を譲渡していくとか、合併するとか、全部出してから廃業するとか、パターンは多分いろいろあると思うんですけど、そういったところに対する理解も深めていながら、企業としては減ったけども、企業活動全体としては市にちゃんと機能として残っているような、そういった在り方という目線ももう一個必要になってくるのかなと思っておりますので、そういったことも取り組んでいただければと思います。

最後、こちらの企業誘致、今北九州市は一生懸命していると思うんですけど、今まで北九州市はよそと比べて人を採りやすいんですよと結構うたっていたと思うんです。ただ、今は北九州市もいよいよ人材不足の波が来ている中で、あまり大きい企業がどんと来ると、今度は中小企業に新卒が全く流れてこないような状況というの生まれていますので、この辺の誘致の仕方も、ただ誘致したからって人を採れるわけじゃないんだよというところを、今後何と言ってそういった活動をしていくのかというのは難しいところがあると思うんですけども、その辺何かアイデアがあれば。

○委員長（渡辺修一君） 産業経済局長。

○産業経済局長 そこは、かなり難しい問題だと思っておりますけど、ただ例えば北九州市でいえば、理工系人材3,000人を毎年輩出していて、実際2割しか大体就職していないみたいな感じになっているので、そういう意味では、ポテンシャルとしては相当あるので、すみません、ちょっと言い方が難しいんですけど、魅力ある企業、働き口ならちゃんと人は雇えるということなので、そこはこれまでも人材が豊富ですよという言い方をして誘致してきたわけですけど、そこをなかなか人が足りないんで、だけどよろしくお願ひしますというのは、なかなか誘致としては。なので、少なくともパイとしてはあるわけですので、引き続き豊富な理工系人材というのは大きなアドバンテージだと思っておりますので、そういう形で誘致は取り組んでまいりたいと考えております。

○委員長（渡辺修一君） 菊地委員。

○委員（菊地公平君） ありがとうございます。

これに関しては、引き続き、もう泥にまみれながらやっていくしかないような分野であると思いますので、引き続きよろしくお願ひいたします。以上です。

○委員長（渡辺修一君） ほかにありませんか。富士川委員。

○委員（富士川厚子君） さっき上野委員も言っていましたけど、2ページにある、各施設、私も仕事を探されている方がいたらA I Mにありますよとか伝えるけど、小倉に住んでいてもそ

んなところにあるんですかという認識で、今就職決定者数2,800名ということで、伴走支援による就業支援のところに書いていますけど、実際1年間でどのぐらいの方を伴走支援しているのか教えていただきたいのと、今大学生も大学2年から就職活動が始まって、3年に決めて、また4年で最後にまた変わって決まると、今大学生の保護者の方に聞いたら、もう大学生活の半分以上が就職活動ということで、企業も大変でしょうけど、新卒の方も大変だなと思いますし、今うちの子は高2ですけど、小学校の頃から学校の先生に、あなたたちが大人になったとき今の仕事の半分はもうない、そういう仕事がなくなっているよと言われて、それが就職するのが順当にいけばあと6年後で、求人と言われても、求めるのと求められる人が時代によってこれからどんどん変わっていくのかなと思うと、本当に大変な、時代についていけないと大変な世の中になるなというのはすごく感じているところです。

さっきの例えば北九州市でしごとまるごと情報局とかとって求人を出されていると思うんですけど、あれを今見たら1,400社か1,600社ぐらい求人が出ていて、これのデータというのは基本的にハローワークがベースになっているのか、教えていただけたらと思います。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 雇用・産業人材政策課長。

○雇用・産業人材政策課長 就業支援施設の若者ワークプラザの部分についてとU・Iターンオフィスについて説明いたします。

若者ワークプラザの利用者数につきましては、延べ約1万人程度で、新規登録される方は、令和6年度につきましては1,500人が登録をされております。若者ワークプラザの中では、いろいろな相談やセミナー等を開催しております。セミナーへの参加、受講者の方は、令和6年度で1,100名ということで、いろいろと取組を進めて、就職決定者数が約1,000人というような形で実績としてはございます。

U・Iターンにつきましては、利用者、登録されている方というのは約1,000人から1,300人程度で、U・Iターンの就職については、オフィスだけではなくて、全体としては令和6年度は過去最高ということで256人というところで成果として出しております。

最後にしごとまるごと情報局についてですけれども、今登録企業につきましては約2,200社入っております、求人情報は、委員おっしゃるとおり、約1,400件ということでございます。これはハローワークの情報ではなく、そういった登録企業の方、2,200社の方が今求人ということでアップをして募集をかけていると。しごとまるごと情報局の登録者数については、現在約2,400人ということで、そこでマッチングができればというところでは考えております。以上になります。

○委員長（渡辺修一君） 就業支援担当課長。

○就業支援担当課長 表のうち、高年齢者就業支援センター、ウーマンワークカフェと外国人就業サポートセンターについてお答えします。

まず、高年齢者就業支援センターなんですけど、年間の利用者数が令和6年度で8,840人です。

そのうち、就職決定者数が約1,000人ということでございます。内訳なんですけど、戸畑のハローワーク利用者と福岡県のはつ・らつ・コミュニティというところと、あと北九州市の高年齢者就業支援センターで就職が決まったカウント全てを足したものになります。

続きまして、ウーマンワークカフェなんですけど、年間相談者数は9,000人です。その結果、就職決定者数が576人でございます。これも、先ほどと同じように女性のマザーズハローワークと福岡県のママと女性の就業支援センターと北九州市の数字を全部足したものになっております。

最後に、外国人就業センターですが、これは大体年間にいろんな問合せ、求職者というよりも主に外国人を採用したいという企業の相談を受けるのがメインの施設になりますが、セミナーに参加してもらったり、直接問合せがあったりしたものを踏まえたと、全部で大体700人近く問合せがあります。その結果、就職決定者数、これはメインの仕事じゃないんですけど、20人ぐらいの留学生と企業のマッチング支援等を行っているところでございます。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 富士川委員。

○委員（富士川厚子君） ありがとうございます。

今お話を聞いていて、行かれています方は多いんだなというのは実感しました。しごとまるごと情報局も、ハローワークの求人じゃないっていうことは、市民の方が知らないともったいなくなって思いますし、前も言ったかもしれないですけど、しごとまるごと情報局というのをアプリにして、今求人を出すのも30万円、40万円お金を出して、時給も1,400円とか出しても、それでも人が来ないっていうのを企業の社長さんとかが言われていて、どうやったら人が来るのかと困っています。30万円、40万円出してもできないこと、しごとまるごと情報局は市だから無料で求人を出せるのに、ここのホームページにたどり着くのが、この情報があふれる中でなかなか難しいと思いますので、そのアプリがあれば、そこからこれだったらウーマンワークカフェですよとか、いろんな提案というのが1個でできるかなと思いますし、こういうのを市政だよりも載せるだけで、毎回どこかの隅にでも広告やQRコードを載せるだけでも、物価高騰の中で副業したい方、高齢者でも仕事を辞めていたけどちょっと働かないとなとか、皆さんいろんな思いを抱えている方はいっぱいいらっしゃると思うんで、ぜひ検討していただきたいなと要望いたします。

○委員長（渡辺修一君） 井上委員。

○委員（井上しんご君） 有効求人倍率が建設業は5倍、介護サービスは3.7倍、輸送が2.1倍ということで、どれも北九州市が非常に強い業種だと思います。結構、事務職が0.4倍ということで、実は北九州市でもそういう雇用の相談があっても建設関係だったらありますよという話をするんですけど、なかなかイメージとかで、そもそも建設業とかが選択肢に入っていないという方も多いと思います。ですので、ここに上げられている3つの方針、そういった知らない方に建設業の魅力とかを発信していく方法、また、社長さんたちとの交流会とか、マッチングと

いうのは方向性としては非常にいいのかなと感じております。

建設とかの関係を見ている、昔は仕事がそこまでないときは、親方日の丸じゃないですけども、親方のパワハラ的なことでも何とかやっていたところも結構大きい会社はあったんですけども、今結構伸びている会社とか、人がいっぱいいる会社というのは社長がいい人が多いんです、働きやすいとか。建設関係も、前は6時、7時、8時までやっているところはもう若い人が辞めてしまって、ちゃんと5時にぴたっと終わる会社は結構若い人が残っているというのを感じます。ですから、昔は腕がよければいいという話から、これからは腕だけじゃなくて人柄とかそういう部分も大事なのかなという部分で、今回の3つの方針というのは本当にそういう部分でぜひ機能してもらいたいなと思っております。

一方で、ここに60歳以上の雇用者数、働く方も増えているということで、70歳から74歳は9.2%増ということで、今この部分も非常に大事だなと思ってます。よく相談があったりするのですが、80歳以上も増えているんですけども、結構年配の方でも元気な方が多くて、最後まで働き続けたいという方が非常に多くおられます。

しかし、一方で、会社としても、最後まで働き続けられるまで働いてくださいということをお願いしつつも、経営の方針が変わったりして、80歳以上はもう辞めてもらう方向でみたいな、結局80歳以上の方は、元気に働いていても急に悪くなったりする場合もあると思うんですけども。なるべく働きたい、これからも元気な方が増えてくると思いますので、ぜひそういった高齢者、80歳以上の方とかも働けるように、コンプライアンス的な部分もあるのかもしれませんが、企業でも人材不足なのに辞めてもらわなくちゃいけないじゃなくて、今回は若い人かもしれないんですけども、そういうところもぜひ研究してもらいたいなと思っております。以上です。要望で終わります。

○委員長（渡辺修一君） 香月委員。

○委員（香月耕治君） 中小企業ということでいろいろと努力されているというのはよく分かりますが、北九州市の歴史を考えると、人口も50年前にピークになりました。それは何でそうなったかということを考えてみると、北九州市の職場に魅力があったということの結果だと。今、熊本で、菊陽町で、さっきの問題にも、課題もありますが、給与が上がって、そして、地場企業の就職がままならない、そういう意味合いでの中小企業の人手不足というものもありますけど、これは考えてみると、それをもう乗り越えて、基幹産業がやっぱりその地域にしっかりと根差さなくては、北九州市も中小でしっかりと頑張られている企業は私もたくさん知っています。魅力的な企業もありますが、北九州市全体のことを考えて、雇用ということを考えた場合に、しっかりとした基幹産業をいかに誘致するかということ、これは行政の課題ということが大きいと思います。しっかりとその辺をしていかないと根本的な解決にはならないと思っていますので、これは行政、それから、議会ともに、しっかりとそういう基幹産業、今は半導体等の誘致の問題もありますが、そういうところがあって、そして、それが中小企業にいろんな

形で波及していくというような経済構造を基本的につくらないと、この問題はなかなか解決しないと思っています。いろいろと努力することは必要なことだと思います。

それと、もう一つ、北九州市の社会的人口が増えたということは、結果的に外国人の就労者、この問題もよく考えないといけないと思っています。特に医療、介護、北九州市は医療でかなり先進地の取組をしていますが、介護、それから、建設業に関しては、外国の方がかなり就業されています。これは、基本的に低賃金ということで、結果的にそういう構造になっていると私は思っていますが、今さっき言った基幹産業の基本的な、北九州市もそうですし、熊本もまさに今後100年とは言いませんけど、50年は問題なくうまくいくでしょう。今日、産業経済局長もおられますけど、そういう面での北九州市の今からの在り方、それから、先ほども言いましたが、建設とか介護とか、そういう低賃金の問題についてどう考えておられるのか、御意見を聞きたいと思っています。

○委員長（渡辺修一君） 産業経済局長。

○産業経済局長 おっしゃるとおりで、引っ張っていく産業というのが重要だと思っていますので、今おっしゃったような企業誘致も含めて、半導体であるとか次世代自動車であるとか、そこら辺をしっかりと進めていくということは重要だと考えております。

一方で、先ほどもちょっと答弁させていただきましたけど、いわゆる医療、介護、建設も含めて、ここで働いてもらわないといけない人たちを、どう給料を上げて魅力的な職場にしていくなかというところは非常に重要な課題だということで私どもは受け止めています。

一方で、建設業は多分かなり給料も上がっていると思うんですけど、どちらかというイメージの問題だったり仕事のきつさだったりということが一つ課題になっているのかなと思いますけど、そこも含めていろいろ払拭していかないといけない部分はあるかなと思います。

医療、介護に関して言うと、いろいろ課題がありますので、もともと保険から成り立っている話でもありますので、その中でどこまで処遇を改善していくかというのはなかなか市役所だけでできることでもありませんので、国とも連携しながらしっかりとやっていくということになるかと思っています。

あと、外国人、これは多くの企業の皆様から要望が非常に高いです。一方で、最近外国人をすごくたくさん雇い入れますみたいなことになると、結構なかなかセンシティブというか、いろんなことが起こる。すみません、言い方はあれですけど、そういうこともありますので、どういう形で外国人に働いていただいて、しかも地元企業が成長できるような形にできるかというのは、悩みながらですけど、引き続きしっかりと取り組んでいきたいなと思っています。以上です。

○委員長（渡辺修一君） 香月委員。

○委員（香月耕治君） 今の話の中で、私は北九州市の経済レベルをどうやって浮揚させるかということに尽きると思います。それが中小企業の浮揚にも直接つながっている。これがもう現

実です。ソーシャルワーカーもいろんな形で、商業施設のこともそれに当たると思いますが、地域経済が浮揚すると、そういうことも豊かになるというか、財布が、個々が豊かになるということで、北九州市の本当に最大の課題、人手不足というものもありますが、北九州市の経済の浮揚に尽きると思っております。ぜひ、これを解決すべき、これは都市間競争が極めて厳しい、それを乗り越えて、行政と、それから、議会とがしっかり手をつないで、今やっていないと10年後の結果がもう出てきます。そんなに時間がないということの危機感を持って、共に取り組んでまいりたいと思っております。以上。

○委員長（渡辺修一君） 三宅委員。

○委員（三宅まゆみ君） 長くなりましたけど、もう少しお付き合いいただけたらと思っております。

ハローワークの話が先ほど結構出たんですけど、今若い人たちはほとんどハローワークを使わないというのがもう現状でありまして、ほとんどがネットとか、もしくは、いわゆる冊子、コンビニとかでもどこでも置いてありますけれど、そういうのを取って。仕事をしているんですけど、ちゃんと就職している人がそういう転職サイトみたいところに登録をされていて、どんどん求人が来るんです。そうすると、来たら、今よりも条件がいい。そもそもハローワークだけだったときは、紹介もされて、非常に安定感がよかったです。でも、規制が緩和されて、いわゆる市場に民間が出てきて、今すごい競争でどこももうかっていますよね。さっき富士川委員も言われたみたいに、1社が安くても小さい欄で5万円とか。でも、毎月だだ漏れのように、うちはもう30万円を年間これだけ使っていますとかという会社もあって、もう年間の広告費がすごく大きいんですけど、現実には採れない。ハローワークと、いわゆるネットで来るようなところとは基準が違って、お給料の計算式とかやり方とかがハローワークのほうが、きちりしているから現実的に厳しいんです。ハローワークで出すよりも、こっちへ出したほうが給料を高く出せる。それから、要件も割と緩やかでいろいろ書ける。だから、こっちのほうがよさそうに見えるというのも現状であります。そこがどうして統一してできないのかなと思ったりもするんですが、逆にそれはもう国がやるしかないと思うんです。最近、ある種の高度人材というか、高い給料のところはビズリーチとか、いつも宣伝がいっぱい流れていますよね。もうリクルートエージェント、何か耳に残るぐらい、何かのときにはあそこに登録すればと。でも、実際に私の知り合いの息子さんとかも、ビズリーチだったかな、給与が月に10万円アップしたとかという話をしていて、そういうのがもう身近にあって、だからとても動いています。だから、1回は入るけど、もうすぐ変わってと。そうすると、会社は育てていけないといけない。製造業にしても何にしても、人材を育成して、育成をしている間というのは誰かをつけてだから、収入はなくて、その分をもうお支払いしていくというような、それが中小企業だけじゃなくて、もう大企業も今離れているらしいので、それが現状だと思います。

雇用がすごく流動化しているというのが今の最大の問題で、そのためには条件がちょっとでもよければみたいな、現実に行ってみるとちょっと違うというのがあって、また次のところに

変わってというのを、もう転々としている人が物すごくいると思うんです。だから、仕事があるからどうしようもできないと言えばどうしようもできないんですが、中小企業はどこも悩みを持っていると思います。私も、そういうことも含めてあったので、結果的にはM&Aをして、大きいところに渡して、そこはうちの会社以降にM&Aをもう5つとか6つとかやっているんです。組織が大きくなれば、例えば少しでも求人をしやすいような、例えばリクルートとかで働いていたような人を1人雇用して、その人を中心に雇用を、また求人をするというようなやり方をやっているというのが現状だと思います。

一番言われるのは、北九州市は給与が低いと、全体的に低いから、例えば大卒の理工系人材が2割しか残らないというのもそこにあるのかなと。私の知り合いのお子さんとかも、結構今回就職で東京に出るとか、高専を出て東京に就職が決まった。お給料はと聞いたら、新卒で結構びっくりするぐらいのお給料をもらうんです。どうしてもお給料というのが、その力を、会社の力をつけていくというの、そこを支援しないと、お給料が払えなかったらどんどん人が逃げていく。どんなにいい社長さんでも、居心地がいいということも一つは大事なんですけど、でも最終的にはお金なんです。だから、お給料が高ければ、ある程度は集まります。でも、お給料がみんなに高く出せないわけです。多分中小企業の社長さんみんながすごく悩んでおられるのは、いい人も悪い人も、悪いというか、いい人もあまり仕事ができない人もみんなある程度条件をそろえないと、自分だけみたいな形でまた辞めていくというようなこともあって、そこは工夫が要ったりというのもあるんですけど。そういう意味で、給与、どれだけ会社の中でお給料を出せるような会社にしていくかというのが、そこをみんなで考えていかないといけないのかなと大変思います。

女性の労働力はまだまだありますけれど、これも国の問題であります。扶養から外れたくないというのがあって、ここはもう本当に国に頑張ってもらうしかない、国にというか国会議員さんに頑張ってもらうしかない。一定のその壁がある限りは、女性は扶養の範囲内、これもお金なんです。だから、いかに収入を得られるかということが非常にこれからもっとリアルになっていくなというのは思います。

あとは、職場環境とかに関しては様々に支援をしてくださっていると思いますけれど、女性がまだまだ働きにくい。国の支援メニューとかがあっても、これも前に申しあげましたかね、大手の企業は、中小が努力してそういうところをつくろうとできないんです。敷地内に勝手に、そこの中の一部とかを請け負っていたりとか、会社に入れたりとかしても、そこの中で自分たちで女性を勝手に雇用することができないとか、女性の職場環境をよくしようと思っても、自分のところの個人の事業者さんだったらできるんですけど、それができない。何かそういうところも市として支援をしてあげる。大手企業さんにいろいろそこができるようにとやってあげることが、結果として、大きい企業の中だから、そこには手を出せないし、そこには補助金も市としても出せないと思うんです。でも、実際には中小企業という、何かそういう悩まし

いことがたくさんあって、現実的には市もいろいろやっていただいているというのは十分分かるんですが、最終的にはそういうことなんだなというのは思います。

あと、人材育成というのをさらにやっていく。北九州市としてこの分野をもっと伸ばしていただきたい、伸ばしたいなど。特にお給料が少しでも高くなる、リスクリングとかをやっていただいているんですが、本当に数が限られていますよね。もう人数が限られているので、全体としてこの方向をもっと上げていきたいとか、もっとお給料を上げて、そこをやっていくんだという、全体として北九州市の企業の価値を上げていくためには、そういう人材育成を市がもっと支援をすべきだと思うんですが、そこも含めて見解があればお聞かせをいただきたいといます。

○委員長（渡辺修一君） 地域経済振興部長。

○地域経済振興部長 三宅委員からの総括をしていただいた形になりましたけども、ありがとうございます。

おっしゃるとおりでございます、給料をしっかりと上げると、そういうところが根底といえますか、一番に近いような大事なところだと思っていますので、これまでの本会議等でも、委員会でも議論させていただいていますけど、そのための原資をしっかりとつくっていただく、そのための補助金とかいろんな制度、また、御相談に乗ったりとか、そういうのを行政としては今後もしっかりと支援していきたいと思っています。

また、今日いろいろ御意見を聞いていますけど、トップの意識、経営者の意識というのが非常に大事だというのは改めて今日感じましたので、行政はこういうことをやっていますよと支援メニューをいろいろつくっても、トップが変わらないと、女性の就業しかり、DXしかり、外国人しかりでございます。トップの意識が変わらないと会社が上がっていかないというところは痛感いたしましたので、その辺も含めまして、総合的に我々は行政としていろいろ支援してまいりたいと考えてございます。以上でございます。

○委員長（渡辺修一君） 三宅委員。

○委員（三宅まゆみ君） 皆さんもう本当に苦しんで、人が足りないということでとても苦しんでおられるので、そこに少しでも寄り添う形で、ぜひよろしくお願ひしたいといます。

○委員長（渡辺修一君） ほかになければ、以上で所管事務の調査を終わります。

本日は以上で閉会します。

経済港湾委員会 委員長 渡辺修一 印
副委員長 三宅まゆみ 印